

旅の記録

一人と暮らし：インド，ネパール編業を例に—

池田 幹生 *

I はじめに

世界のいろいろな所で、人が何をどのように感じ、どのように考え、どのように暮らしているのか、そっと覗いてみたい、触れてみたい。旅を試みてきてきたことを地理の授業の参考資料として、生徒向けに配布している。以下にその一部(インド，ネパール編)を紹介します。

II 北インド

力車マンと …自己主張は美德…

デカン高原北部カジュラホ：1978.12.

4時前か。日暮れまで少し時間がある。街の中心部まで歩いてみようかな。

ホテルの門を出ると力車が寄って来る。「どこへ行くの?」「ちょっと街まで」「力車に乗らないか。街まで3ルピー(3RS)だ(当時1RS=約26円)」「いや俺は歩いて行くよ」「街まで遠いぞ」「ノー、たった1kmじゃないか」「オー、おまえはよく知っているな。じゃ2RSでいいよ」「いや俺は歩きたいんだ」「しかし、もう日が暮れるぞ」「いやまだ4時だ。充分時間はある」「OK。しかたない、1RSにしておくよ」

ふっかけた3RSを値切られていると思って、上のように反応したのだろう。今なら「そうかそんなら力車に乗って街まで行ってみようか」となるのだが、この時は初めてで、まだインド人の反応に慣れていない。「いや俺はただ歩きたいんだ。歩きながらじっくり街が見たいんだ」とつい固執

*愛知県立岡崎北高等学校

してしまう。こちらのゆっくり街を歩きたいという意図が理解できないこともあろうが、この位では力車マンは全くめげない。「俺の力車に乗って街に行こう」。別の力車も現れ「俺のに乗らないか」。最初の力車マンがあわてる。



写真1 チャンドニチョークの力車(デリー：1978)

ホテルの門の前での2台の力車と私とのやりとりを目にして、通りがかりの人々が次々立ち止まり、人だかりが出来る。自転車のハンドルにバックミラーを4つ付けた高校生も通りかかって話に加わる。泥除けに描いた虎の絵を見せて、「どうだ、格好いいだろう」。人だかりの中では高校生の少年の情報がいちばん豊か。村には月100RS(約2600円)で暮らしている家族も少なからず居るという。

30分ほどして、業を煮やした力車マン「おまえの友達はどうしているんだ」。「ホテルの中で休んでいるんじゃないかなあ」「じゃあ、お前が友達の所へ行行って俺の力車に乗るように言ってくれ」唾然。さすが「自己主張が美德」の国だ。「君の依頼に応えることは出来ない。なぜなら、友達は疲れて休んでいるのかも知れないし」

相手が嘖然としてしまうような要求をしているのだから、きっぱりと「ノー！」とだけ言えばいいのに、つい日本の感覚で、断るのに言い訳めいたことを言ってしまう。相手は、そんなとまどいには全くお構いなしだ。「そうか。じゃあ、俺は明日8時にこの門の前でお前を待っているから、お前は友達を連れて俺の力車に乗りに来てくれ」「だめだ。我々はチャーターバスに乗らなければならないから、君の力車には乗れない」「オー、そうか。わかった」

インドとはいえ、デカン高原北部の12月末の陽の落ちた後は、セーター1枚では肌寒い。門衛が門を入ったところで焚火を始めた。もう6時過ぎだ。十数人が門に入って焚火を取り囲む。

うちの一人が焚き付けの木切れを持って来て腰を降ろす。「あっ、いいな」とつい目で追う。力車マンは自分の力車の座席をとってきて焚火のそばの地面におく。「こっちの方がもっといいな」と見てると、思いがけず「座ってくれ」。力車マンは最初の「あっ、いいな」と見た目の動きを見逃さなかったのだ。

腰を据えて話を続ける。15分もたった頃、力車マン曰く「ちょっと待て」。何事かと思えば、「俺は明日8時に門の前でお前を待っているから、お前は友達を連れて俺の力車に乗りに来てくれ」。「それは駄目だ。我々はチャーターバスに乗らなければならないから、君の力車には乗れない」「オーそうか。わかった」

よもやま話を続ける。更に約15分後、力車マンが突然「ちょっと待て、俺は明日8時に門の前で…」同じことを言う。同じ問答が繰り返される。

門から入って来るサリー姿の数人を見やって「あれらは着飾っているけど、中はゆるゆるだぞ」。金持ちに対する反感から出た冗談とも気づかず、真に受けて「何で知っているの?」。力車マン達は笑っているだけ。サリーの人達は、焚火の我々

のことは石ころのごとく無視して歩いて行く。

そうこうしているうちに8時過ぎになり、お開き「それじゃあ」という時、力車マンはまたまた「ちょっと待て」。同じ問答が繰り返される。焚火を始めてから2時間くらいのうちに都合8回程も繰り返された。

翌日、お寺の見学を終え、チャーターバスの席に戻りふと外を見ると、昨日の力車マンがいる。「あっ、まずい」そおーっと隠れようとしたが、いち早く彼に見つかってしまった。「ハイ、ミスター池田。ハウワーユウ?」。昨夜8時過ぎまで4時間もつき合わせた上、彼の15分おきの要求を聞きもせずバスに乗っているのに、怒るどころかにこにこして手を差し伸べてくる。こちらも手を差し出し握手するものの、どうにもしごこちが悪い。

日本では、相手の意向を察して動くのが当たり前。いわんや一旦口に出して要求された事に応えなかったら、顔に泥を塗ったことになる。そういうものさしの世界(日本:謙譲が美德)の住人にとって、この力車マンのにこにこした態度は、どうにも落ち着かない。

彼らは自分の主張を目一杯する。しかし叶えられなくても怒らない。力車マンはこういう世界に住んでいるのだ。だからにこにこして握手してくれたのだろう。

彼らの「自己主張」は、こういう精神に裏打ちされているのか。

タージマハルの鞣 …公平な取引…

カジュラホ: 1978.12.

真鍮の針金でつくった、鞣になったり、UFOになったり、鼓になったりするおもちゃをインドで見つけた。あっいいいと欲しくなる。日本なら500円で買ってでもいい代物。買った人(日本人)に「いくらで買った?」と聞くと、最初は1つ5

RSで買い、次は1つ1RSで買ったという。それならと胸ポケットに1RS入れて街を歩く。

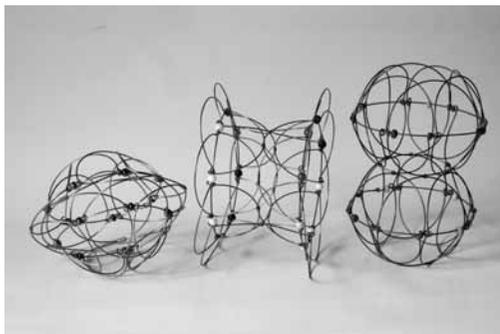


写真2 タージマハルの鞆 (アグラ：1978)

お寺の門前で、その真鍮を何十と腕にはめた男に出会う。「いくら?」「2つで15RS」「(何というぼりかた!)高い!」「じゃあ1つ5RSでどうだ」「(なに?1つ5RS?…ああ確かに安くなっている。…いかんいかん。その手に乗ってはいかん。1つ1RSなんだから)まだ高い!」「じゃあ、いくらなら買う?」「(俺は知ってるんだぞ)オンリー1RS!」しかし、その男は手を顔の前で軽く振って去ってしまった。あ一行ってしまうのか。それ欲しいのに。5RS出しても別にかまわんのだけど。

仕方なくバスに戻り一番前の席に座る。ふと外を見ると先ほどの男が、すぐ目の前の入り口の下に立っている。目が合うと「1つ2RSでいい」ときた。こちらも意地をはって「ノー、オンリー1RS!」。その男あらぬ方向を向くが、今度は立ち去らない。そうこうしているうちにバスの運転手がエンジンを掛ける。その男、とうとう「1RSでいい」。

最初から手間を掛けさせずに1RSで売ればいいものを。俺は1RSということを知っているのだから、じたばたしても無駄なんだ。どうだ参ったか。そんな態度で、胸ポケットからかねて用意の1RSを出す。

意気揚々とホテルへ帰ると、いくらで買ったか

教えてくれた人が腕に2つ重ねてはめていた。もしやと聞くと「2つ1RSで買った」。

数年後、新聞の「遊びの博物誌」という欄に「タージマハルの鞆」という名前で、この針金細工のことが紹介されていた。そうそうと、うなずきながら読んでいくと、記事の最後に、「現地の人は25パイサ (=0.25RS) で買う」。

いくら安く値切って買ったと思っても、結局はいいようにあしらわれている。北インドではそんなことの連続だった。上のように数年かかって「やられた」ことに気づくことまでである。

しかし、旅の間中、何か腑に落ちないものもややもやしている。インド人と取り引きすると結局「やられてしまう」とは言うけれど、それはRSの世界での事。円の世界に頭を切り替えると話は全く逆になってくる。

今手元にあるタージマハルの鞆は、RSの世界で考えると「4倍の値で買わされた」のだが、円の世界で考えるとたった26円で買ったのだ。真鍮の針金を使って手間暇かけて作った物、日本では500円で売っても採算がとれないような物を、たった26円で買って来てしまうということは、一種の泥棒ではないのか。

インドの人にとって1RSというのは、たとえばタージマハルの鞆が4個買える価値がある。日本でタージマハルの鞆を4個買おうとすると少なくとも2000円はかかる。この場合1RS=2000円となる。それを1RS=26円(1978年)のレートで交換してしまっているわけだ。

観光客が何RSかをぼられたと言う一方で、日本とインドの貿易では年間約100億RSもの物資(1990年)が1RS=5円弱(1992年)で取り引きされている。ところが、1992年の経験では、実感レートは1RS=100~200円もしくはそれ以上で、2RSあれば、ちゃんとしたランチが食べられる。インドは日々刻々、自国の100~200円もしくはそ

れ以上の価値のものと、日本のわずか5円のもの
と交換していることになる。貿易すればするほど、
損をしてしまうのではないか。

その一方で、通貨価値の「安い」国は輸出好調
となり、経済成長して「豊か」になるという面も
ある。この場合、自国の「富」を「格安」に輸出
することによって「豊か」になるという「逆説」。
これって本当に「豊か」になっているのか。

このように貨幣価値のひどく違う国の間での取引は、
どのように行われるならば公平であるといえるのか。
ホテルのベッドで、そんなことを考えていた。

力車を漕ぐ …インドで50PS稼ぐ…

タージマハル アグラ：1978.12.

「満月に浮かんだタージマハルがいいぞ。」夜8
時過ぎ、その人達と一緒に見に行く。ホテルから
歩いて10分程で、星空にほのかに白いシルエット
を浮かべたタージマハルに会えた。「闇夜もいい
なあ」他にも何人かのインドの人達が見にきてい
る。

門を出たところに、力車が待っている。5、6
人で門から出て行けば、早速「乗らないか」。「い
いや。少し散歩していくからいいよ」。力車マン
はおかまいなしについて来る。「ホテルはどこ？
そこなら1RSでいいよ」「僕らはそぞろ歩きたい
んだよ」「じゃ、50PS (= 0.5RS) にしとくよ」「た
だ歩きたいんだから乗らないよ」とうとう力車を
降りて、曳きながらついてくる。

しばらく街をふらふらするうち、中に一人いた
女の人が「足が痛くなった。私、力車に乗りたい」。

女の人を乗せ、歩いてついて来た力車マンは2、
3分も歩かないうちにじれて「早くホテルに乗せ
て行きたい」。夜10時に女の人を一人で帰す訳にも
行かず、誰かがそぞろ歩きを諦めてついて行か
なければならなくなる。じゃんけんで負けたのは
私だった。

ふと、いたずら心が湧き、力車マンに言う。「も
し俺が力車を漕いだら、おまえは俺に50PS払う
か」。力車マンは意外にも「OK」。

自転車に乗る気分の延長で力車に乗る。ところ
が、一漕ぎしただけでびっくり。「これはえらい
ものに乗っちゃった」。見るとするとで大違い。
車体が右に傾いているので、跨いでいるだけで姿
勢が苦しい。漕げば、どうしても右にハンドルを
取られる。とてもまっすぐには進めない。しかも、
ペダルは普通の自転車のギアをハイにして漕ぎ始
めるよりずっと重い。後ろに大人が2人乗ってい
るのだから当然と言えば当然だが。彼らは毎日こ
んな重いペダルを漕いでいるのか。

斜めになって漕いだ力車が、路地を蛇行して
走っているうちはまだ愛嬌だった。しかし、右後
方から幹線道路が合流する所が近づいた時、たま
たまトラックが走ってきた。どうしても右へ右へ
と道路中央部へ出て入ってしまいがちな私の漕ぎ
方に、後方左の客席ではらはらしていた力車マン
はたまりかねて飛び降り、後ろをぐるりと回って、
私のハンドルに右後ろから取り付く。走りながら
ハンドルを左へ向けようとする力車マンに、私は
「OK、OK」と腕を振り払いながらなお漕ごう
とした。しかし内心は「やいやい、このままじゃ
ぶつかっちゃう。いかんいかん。どうやったら右
へ曲がらずに行けるか。あーまずい。トラックが
来る」。

力車マンに助けられて、なおしばらく漕ぐと、
力車マンが言う。「ちょっと行ったところに俺の
家がある。寄って行かないか」。おっ、ありがたい、
暮しぶりに触れられる。不思議に不安は感じな
かった。ここまでの力車マンの対応が、そう感じ
させたんだろう。「OK、行こう」。

「俺が漕ぐ」。力車マンはこの漕ぎにくい力車を
魔法のようにすいすいと漕いで行く。さすがプロ
だ。もこもこ漕いでいる背中、尻を見て感嘆する。

広い道路を左に折れ横道に入ると、じきに彼の家の門戸の前だった。スライド式の大きな戸を開けて、前庭に力車を引き入れる。奥に平屋の建物がある。戸を開けて招き入れられて驚く。

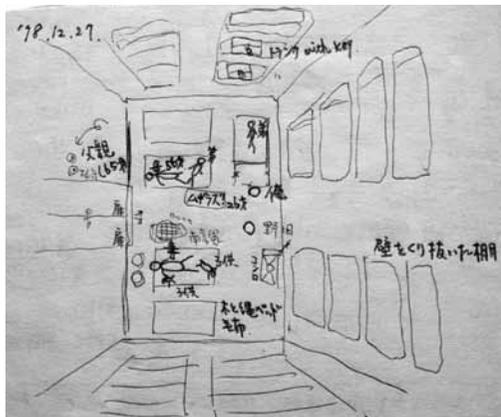


写真3 力車マンの家の中 (アグラ:1978 旅のノートより)

5m×10m位の一室に、一家全員のベッドがずらりと並んでいる。ベッドの木の枠に麻縄がびっしり張り渡してあり、それがマット。その上に毛布にくるまって彼の父母、奥さん、子供3人が寝ている。彼の父母の2つのベッドと彼ら夫婦の2つベッドとの間に幅2m程の空間が有り、そこへ小さな腰掛けを並べて座れと言う。

えらいところにはいっちゃったと尻込みしていると、彼は構わず奥さんを起こす。彼女は寝ぼけまなこで、ベッド下にあった石油コンロを引き出し、火を付ける。壁際から持ってきた凸凹のアルミ鍋にミルクと水を半々にいれ、更に砂糖をたっぷりと紅茶の葉を一掴み入れる。それをコンロに掛け、ぐつぐつ煮立てる。

コンロの石油をガス化して燃やすシューという音聞きながら、ミルクティーが泡立つのを見ていた。出来上がったミルクティー、チャイは、ヒビが入り緑の欠けた紅茶カップで出てきた。「これ大丈夫でしょうか」。一緒だった女の人は不安がる。「煮沸してあるから大丈夫でしょう」。

インドのチャイの味を楽しみながら話をする。

「1日5~60km走る。従って稼ぎは、5~60RS。力車1台は1020RS」「この辺りにも悪い力車マンがいて、観光客を案内してやると言っただけで法外な料金をふっかける奴がいるから気を付けなければいけない。ところであなた方は明日はアグラを見て回るのか。俺は朝7時半にホテルの前で待っているから来て乗らないか」「我々はチャーターバスに乗らなければならないからだめだ」「おーそうか、わかった」

ご馳走になったうえホテルまで送ってもらう。料金は請求されなかった。翌日会うことはなかったが、会っていたら彼も、カジュラホの力車マンと同じように「ハロー、ミスタ池田」とにこにこして来ただろうか。

Ⅲ 南インド

南はこんなに違う…南インドの人は恥ずかしがり屋? 写真に撮られるとき…

マドラス(チェンナイ):1992.8.

朝7時、マドラスの幹線道路を歩いていたら、おばさんが路地を掃いているのが見えた。掃き目のついた道なんてここに来て初めだ。掃いている姿を写真に撮りたかった。ただ、突然そのおばさんを撮るといのは、あまりに不躰だ。きっかけを探そうと躊躇している間にそこを通り過ぎてしまった。前方に一边が1m余りの鉄製水タンクがあった。傍らのおじさんが、タンクに繋いだ太いゴムホースで壺に水を入れているのが見える。目の前には30個程の壺とそれを運んで来た女の人達は何人も群れている。

すぐ写真に撮ることがはばかられたので、相手の抵抗が少ないかもしれないスケッチを始める。子どもを左腰に抱いた女の人が5、6人の仲間から抜け出て、スケッチしている手帳を覗きに来る。あまりに粗末なスケッチなので、すぐにでも引込めたい。しかし、これを開いているからこそ覗

きに来てくれるんだと、隠したいのをぐっと我慢。そんな下手な絵なのに、その女の人は絵を見てにこっとしてくれる。そのうえ仲間の一人の所へ戻り、この絵を見るようにと連れてくる。

連れられて来た人も、おもしろがって二人でにこっとしてくれる。そうこうするうちに後ろの仲間も来てぐるっと取り巻き、覗き込む。いよいよもって穴があったら入りたい気持ち。ついには個人としての恥ずかしさばかりか、「私の絵はこんなに下手だけど、普通の日本人はもっと上手い絵を描くんだよ」と妙な「愛国心」すら感じてしまう。

最初の女の人が右目の前に指を持ってきて輪を作り、パチッというジェスチャーをする。えっ、カメラいいの！ありがたい。早速カメラをバッグから取り出す。ところが、その女の人はパチッとやってくれたのに、いざ撮らせてもらおうとすると子どもをカメラの前へ置いたまま自分だけ後ろへ逃げていこうとする。子どもだけを撮ってという身振りだが、恥ずかしがってそうしていることが良く伝わってくるから、一緒に一緒にと手招きする。



写真4 子どもを左腕に抱く女の人とその仲間 (マドラス：1992)

後ずさりする女の人を、連れの人々が捕まえてカメラの前へ押し出す。やっとな母子揃ってカメラに収まる。すると今度は攻守交代。それまで捕まえられ、後ろから押されていた女の人が急に元気になってこれまでとは逆に、後ろから押してい

た女の人をカメラの前へと押して「さあ、あんたも撮してもらいよ」。今度の女の人でも体は後ろへ引けているものの、気持ちは撮ってもらいたいのびんびん伝わってくる。この人もパチッ。

こうなると連鎖反応。カメラを構えると皆恥ずかしがって一旦は逃げ腰になる。しかし、本心は写りたいというのが、ひしひしと伝わってくる(小さい頃の自分達をそこに見るようだ)。こっちもその気持ちを汲んで、一緒に写りましょうと手招きをする。知らず知らず「一緒に、一緒に」と言っていたのだろう。周りを取り巻いている子ども達も口真似で「イッシュヨニ、イッシュヨニ」と言って、手招きしている。

他人には「イッシュヨニ、イッシュヨニ」と言えても、「自分を撮って」とは、とても言えない。だから、たまたま通りかかった犬がいると、早速抱きかかえて「この犬を撮ってあげて」。まだ撮っていない子がやって来ると「この子も撮ってあげて」。じゃあと、その子を撮ろうとすると、他の子ども達がワーと寄って来て、カメラを取り囲む。いい目だ。スポイルされてない、いい顔だ。



写真5 子犬を抱いてカメラを取り囲む子ども達 (マドラス：1992)

南はこんなに違う…南インドの人は謙譲が美德？ 道を尋ねたら… コーチン：1992.8.

アラビア海沿いのコーチン。カタカリダンスの会場を、通りがかった紳士(海運会社に勤めるコシさん)に尋ねる。「コッチンカルチュラルセンターを知らないか」と辺りの家々をあちこち聞き

回ってくれるが、なかなか見つからない。スコールの前触れらしき雨粒が落ちてきたので、もういいからと言っても、「ノープロブレム」で探すのをやめようとしな。ある家のおじいさんから場所を聞き出し、そこまで案内すると言ってきかない。

降り出したスコールの中を大通りまで一緒に走る。大通りの軒下でしばらく雨宿り。激しい雨は、じき弱まる。雨の中をやって来たオートリキシャに乗り込むと、コーチンカルチュラルセンターは1 km程の所にあった。

カタカリダンスは夕方5時から。センターの軒下で雨宿りの間、お礼代わりに写真撮影をお願いすると、端折っていた腰巻きを裾まで垂らし、眼鏡を取り、身だしなみを整え、直立不動の姿勢でカメラに向かってくれる。

スナップを撮るといよりも、写真館で記念撮影を撮るかのようだ。ファインダーを覗きながら、同じようにしゃちこぼっていたマドラスの給水場の人達やオートリキシャの運転手達のことを思い出していた。南の人達だなあ。北の人達の強い押し出しとは大違いだ。

雨が止んで、「この後どうするのか」と聞くので、「駅へマドラスへの切符を買いに行く」と答えると、「案内してあげよう」。駅への道すがら、交差点毎に道を確かめてくれる。夕方5時にちゃんと来れるように。

ふと昼を過ぎていることに気付く。バナナの葉に盛った料理を食べたいと言うと、幾つかの店で尋ねてくれるが、探せない。バナナの葉は諦めて、良さそうな食堂と一緒にいる。お礼に食事をと申し出るが、どうしても要らないと言ってきかない。せめて飲み物だけでもと言っても、要らないの一点張り、

テーブルを挟んで、何も食べない飲まない人の前で食べ出す羽目になってしまう。どうにも落ち

着かない。それを言うと、やっと自分の分を注文してくれる。コシさんのランチは、お代わり自由のライスとおかずが4品で2RS (=10円)だった。

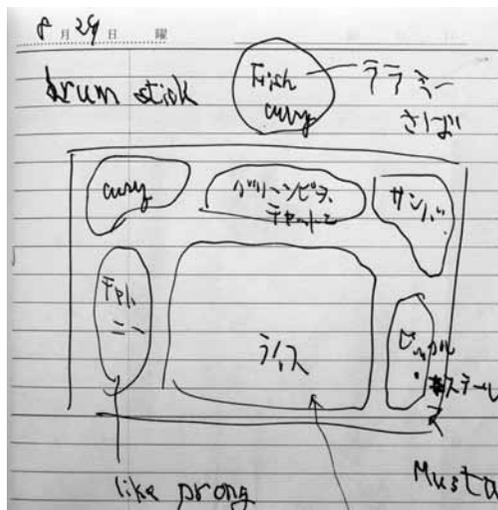


写真6

このときの私の食事。幅30cm位のステンレスの盆に凹みが付けてある。中央にご飯。周りに5種類のおかず。マドラスでコーチン出身の人に勧められたフィッシュカレーも注文。合計7RS (コーチン:1992 旅のノートより 食事に使わない左手で描く)

食事を終えて駅へ向かう途中、彼は言う。「アイムハッピー。アーユー?」。コーチンばかりか、マドラスでも、親切にしてもらっているとき、こう聞かれた。北ではこんなふうには聞かれたことはない。

駅には窓口が5、6あり、そのいずれにも十数人の行列があった。コシさんは、幾つかの窓口を聞き回ってくれ、「この列に並んでいけばよい。それじゃこれで」と、にこやかに去って行った。最初にカタカリダンスの会場を尋ねてから3時間余りも経っていた。

Ⅳ ネパール

ひとのくらし …人をもてなすこと…

ネパール，ナムドゥ村：1982.8.

ネパールの首都カトマンドゥから東へバスで1日，さらに歩いて5時間のところにナムドゥ村がある。青年海外協力隊の知合いをその村に訪ねた。

この村は自給自足なので，協力隊員が自炊をすることは無理だという。隣村に入った隊員は，間借り先の大家さんの賄いで一冬過ごす間，おかげがダルという豆のスープだけで栄養失調になり，12kg痩せたという。栄養を確保するため，知り合いは勤め先の学校に通うゴバル少年（17歳）を雇い，村の家々を回っての食材調達と食事作りを頼んだ。

この少年の招きで，彼の家を訪ねた。招待された5時に着く。家は二階建てで屋根裏部屋もある。向いにも同じ様な家が並んでいる。入り口の脇に，竹籠に入った鶏が一只。

家の中に入れとも，よくおいでたとも，何とも言ってこない。放って置かれる。家の中から，ゴバル少年の兄らしい人が手になたを持って出て来る。籠の鶏を手にか陰に消える。しばらくして首

の離れた鶏をぶら下げて戻って来る。真っ暗で何も見えない家の中へ入ったまま出て来ない。そのうちに白い煙が流れて来る。家の中に向かって闇雲にストロボをたく



写真7 鶏肉を切るゴバル少年の兄
(ナムドゥ村：1982)

(後で写真を見ると鶏の毛をむしっていた)。

1時間以上待つ，やっと招き入れられる。入り口すぐの左脇には山羊の部屋。その奥に台所。一人の兄が先ほどの鶏の肉を捌いている。先ず，なたの背を足の親指と人差指の間に挟み，刃を上に向ける。肉を手を持って粗切りにする。次に，羽子板状のまな板に載せて細かく切る。別の兄はそれをフライパンで炒める。地面に浅く丸く穴を掘ったところがコンロ。心許ないくらい細い枝が燃えて熾きになっている。

料理を作っているのは，ゴバル少年の兄で，母親は出かけていて不在だ。普段は，誰が食事を作っているのだろう。知り合いの食事を作っているのも，ゴバル「少年」だ。

2階へ行く階段を登りかけた時，右肩にザラツとするものがかかる。鳩の糞に当たったのだ。鳩の糞が雨に濡れそぼった肩にこぼれる。一風呂浴びてさっぱりするという日本で当り前に満たされていたことが，ここナムドゥに来て以来全く閉ざされ，閉塞感にさいなまれた時に鳩の糞だ。さっぱりしたい願望が更に強まる。

2階の部屋の片隅には林檎箱2つ程の大きさの祭壇があり，花や赤い粉などで祭ってある。ゴバル少年の家は貧しいが僧侶階級の家だ。その部屋から丸太を鋸の刃状に削った階段が屋根裏部屋に続いている。覗くととうもろこしの山。

祭壇の隣の部屋にこぎれいな毛布が敷いてあり，そこに座るように言われる。雨期の道に落とされた牛の糞が，朝夕行き交う家畜に踏みつけられ，道の赤土と混ざり合っぐちゃぐちゃになったところや，山羊の糞がこぼれてつるつる滑る畦道を雨の中，一時間近く歩いてやっと着いたこの家の前で，更に一時間以上待たされ，ようやくホッとくつろげる場所に座れた。その毛布の安心感は忘れ難い。

待つこと暫し，やっと先ほどの鶏の焼いた物が

来る。旨い。とてもうまい。村へ来て初めての肉だ（最後でもあった）。ヨーグルトもでる。鶏肉とよく合って旨さが増す。とうもろこしも出してくれたが、後にも先にもあんなに堅いのは食べることがない。ちょっと遅れて鶏のカレー煮も出る。旨い。あまり旨い旨いと言うので、知合いは「うん、こちらでは全く無駄にせず、すべて使い切るんだよ」。その瞬間、庭や道の赤土と糞と雨とでぐちゃぐちゃになった所を歩いた鶏の足がイメージされて、それを摘んでしまったら、という心配で頭が一杯になってしまった。それまでの旨い旨いの天国から一遍に地獄へまっさかさま。

以後、足やトサカの肉の形がよく見えないローソクの暗がりに皿を持って行き、喉に放り込む。鶏の旨さが台無しだ。

おまけにこんな焼いた肉なんかを食べれば喉が乾き、無性にビールが飲みたくなる。しかしそこにはビールもない。もっともビールはこのあたりの1日の収入よりも高いので、たとえあって村の人の手前、飲む訳にはいかない。

知合いの水筒の水は僅かしかない。せめて下宿へ帰れば、バンコクで偶然買ってきたブランデーと水はある。地獄へ落ちた事と渴きとで、水とブランデーが飲みたくてたまらなくなる。

毛布は、見るからに気を使って用意してくれたことが分かる。家の人は泊まって行って欲しいと強く言う。その気持ちは毛布からも充分伝わって来る。日本に帰った後で知った事だが、ゴバル少年の家では隣近所何軒かから借金をして鶏を用意してくれたのだった。それなのにこちらは、ただ帰って水と酒を飲みたいの一心だ。迷いに迷ったが、とうとう知合いに我儘を言って帰ることにしてもらう。

雨の中、ゴバル少年は懐中電灯をつけて案内してくれる。棚田の畦道は懐中電灯で照らし出されたところとその周囲少ししか見えない。後ろの谷

は漆黒の闇だ。

先ほどからおんなじ所ばかり歩いているような気がする。来るときは一時間足らずで着いたのに、もう1時間は経ったはずだ。靴もふくらはぎも、手もぐっしょり濡れてしまった。いったいどこを歩いてるんだろう。「帰したくないからわざと道を間違えてるんだろうか」1時間15分ほど経った時、たまたまうがったことを言ってしまう。そのすぐ後、見慣れた道に出る。こんな時人間のありようが露見してしまう。

ここに帰ればと思っただけでむりやり帰ってきた下宿には僅かな水しかなかった。生水なら幾らでもあるが、コップ1杯飲めば、即アメーバ赤痢になる。他の酒好きの協力隊員(医療技術者)が酔っぱらって喉が乾いたとき、「ええい飲んじゃえ」と3度試みて3度赤痢になったと言う。日本では新聞沙汰だそう。濾過器を通して、煮沸しなければ飲めない。

ぐっしょり濡れた手足を抱えて思うことは「こんなに無理して帰って来たのに」。癒えない渴きにさいなまれて、ひたすら叶わぬ願いを想う。さっぱりしたカーベットの所で、一風呂浴びた体を「あー、いい気持ち」とのびのびさせながら、ビールを飲み干せたらどんなにいいだろう。その夜知合いに対して酒の酔いもあってわめいたのは「カトマンドゥに帰ったら幾らかかってもいいから、バスタブのあるようなホテルで、湯をザーザー溢れさせて、ビールをガブガブ飲んでやるぞー！」

知合いはにやにやしている。「何かおかしいかん？」

「へへっ、実は僕も最初の頃そうだったんだ。その頃を思い出してね」

ひとのくらし …あたりまえのこと…

ネパール、ナムドゥ村：1982.8.

日本を立つ前、一番心配していたのは手で尻を

拭くことだった。「せっかく村へ入るのにこんな物を持って行くとは」と、忸怩たる思いで、秘かにポケットティッシュを2週間分の14個忍ばせて行った。

しかし、村へ入った翌朝、便所で拭いたティッシュをつい見てしまった時、「あっ、なーんだ」と気付いた。それまでは手で拭くというと、ゴロンとしたウンコを手で持つような気がしてしまっていたが、実は肝心の尻にはもうほとんど付いていないも同然であるという、当り前のことに改めて気付いたのだ。その時からティッシュよさらば。ネパールスタイルで通した。

ウISKYの瓶に入れた水を左手に受け、水がもれないうちにすばやく尻を清める。拭かずに濡れたままズボンをはいてしまう。最初はビショビショするが、ほんの1、2分程で乾いてしまい、気にならなくなる。

ネパールの料理にもそれはそれで味わいがあり、とりあえずは慣れた。とりわけ鶏肉の旨さは忘れられない。もっとも、知合いは「健康な時にはいいけど、病気になると喉を通らなくなる。そんな時は猫マンマに限る」と言うが。

参ってしまったのは、予想もしないことだった。

それは先ず、汗びっしょりになった体を一風呂浴びて流し、さっぱりさせる。次に畳の上にあぐらをかき、「あー、いい気持ち」とのびのびした気分になる。最後にビールをウゴウゴと息もつかずに飲み干す。という、家にいる時には極く当り前の事である。これが村ではできない。こんなことは気にも留めて無かったが、2、3日経つと、だんだんとボディープローのように利いてきて参ってしまったのだ。

家にいる時、全く当り前すぎて満たされないことがあるなどとは思ってもみなかった日常の暮らし方。その一部が叶えられなくなったとき、何よ

りも参ってしまった。特別な何かではなく、極く当り前のことであるだけに虚を突かれた思いだ。

村には風呂が無い。体を洗うとすると、村はずれの小川を堰止めて小さな滝を作った洗い場へ行くしかない。しかしそこから帰って来るのに500mもぐちゃぐちゃの道を歩かねばならないのだ。足元は元の木阿彌、さっぱりすることはできない。

畳の上でほっとできるかという、これが難しい。下宿にはカーペットが敷いてあり、着いたその日にはその上で大の字になり、のびをしてくつろいだ。子供もちゃんと靴を脱いで上がっている。ただなんとなく靴下が赤ぶんでくるなあとには思っていた。

翌日その子供達に出会う。ふと足元を見ると、なんと裸足だ。裸足には驚かないが、牛、山羊の糞と赤土とが、雨期の雨の中で牛などにグチャグチャに踏みつけられて、踏み石の上にはまではねているのだが、そこを裸足で歩いているのに参ってしまった。



写真8 学校へ行く前に草刈を終える子ども達
額の紐で背中の籠を負う（ナムドゥ村：1982）

その時、20数年前の自分を思いだしていた。まだ牛が田を耕していた頃、そこらじゅうに牛の糞が落ちていた。田植の時期、それに雨が当たって狭い農道いっぱいにはブヨブヨになって広がってい

る。裸足で通り合わせた小さな子供は、歩幅が小さくてどうしてもブヨブヨの糞の周りへ足を入れなければ向こうへ行けない。泣きたい気持ちで爪先を入れる。向こうへ渡るや否や、急いで水路で足を洗う。

そんなところをよく歩くなあ。見ているだけでたまらない。しかも、その足で、昨日「やっとこの上ならくつろげる」とのびのびしたあのカーペットの上を歩いているのだ。もはや唯一のくつろげる場も無くなってしまった。この赤ぶんだ靴下もあの糞混じり赤土の色か。

5日間の滞在中、結局1回も体を洗わなかったが、特に臭くてたまらんといい訳ではなかった。それどころか、知合いにいたっては村からカトマンドゥに戻っても、シャワーもめんどろがって使わないときもあったくらいだ。首の下を指でこすって「まだ余り汚れていないなあ」。

この知合いが特別不精というのではない。実際雨期なのに、身体的にはそれほど汚れていないのだ。雨期とはいっても、日本の梅雨とも夏とも全く違って、乾燥しているので体の汚れ方がごく少ない。ゴバル少年の家から帰った時、厚手の布製の運動靴は雨でグショグショになっていた。下宿の部屋は倉のような厚い壁で囲われている。その部屋の戸を閉め切って、その中へ靴も入れて寝たのだが、翌朝もう靴は履けるくらい乾いていた。

ネパールであまり体を洗わないのは、ネパール人が不精だからではなく、風呂にはいる必要がとて少ないからだ。「日本へ来たネパール人が、夏に夜風呂に入ったのでは朝までに臭くなってしまふから、朝入り直す」と言うのを聞けば、納得がいく。日本人が清潔好きだから風呂にはいるというよりは、入らないではいられない気候だから入るといのが実状だろう。

そんなことは頭では承知していても、体が納得してくれない。

そんな体の「発見」が、とてもおもしろかった。

V おわりに

1950年代高度成長直前の日本の農村で育った筆者にとって、1980年前後のネパールの農村はひどく懐かしい風景であった。しかし、そこで垣間見た暮らしは、全く経験したことのないもので、おもしろいことだらけであった。

南インドで、人の対応と顔つき(写真4・5)が北とは全く異なる人達に出会ったとき、高校地図帳の南アジアの言語図が頭に浮かんだ。インドの北・中央部はインド=ヨーロッパ語族インド語派、南部はドラヴィダ語族。この違いを反映しているのか。またネパールでは、南側はインドから続くインド語派、北側はシナ・チベット諸語に二分されている。両者の顔つきや宗教の違いは、明白だったが、混住している町や村で接触したためか、人々の対応の違いを確認することはできなかった。

南インドからの帰途、マレーシア航空の機内で中国系と思われる客室乗務員の顔を見たとき何故かほっとした。旅行後写真を整理していて、あっと気付いた。目だった。写真には、大勢の子ども達の強い目が、じっとこちらを見据えていた(写真5)。大きく見開いた黒くて強い眼差しばかりを受け続けて、意識しないうちに圧迫されていたのだ。帰りの機内で久しぶりに自分と同じ種類の目を見て、ほっとしたのだった。



写真9 ネパールのいろいろな民族の顔(ナムドゥ村:1992)